

五百題癸句集 下



秋之部

立秋	初秋
<p>むらりとよみはあき秋の立 宿備の山伏かち勢と相の秋 秋その山や響は樹毛のさう砂</p>	<p>誰笛うけよとよまの秋の序 と川秋や親よと響と角力 初秋や帷子ふかふか雨</p>
<p>鬼貫 居中 浪化</p>	<p>由之 米岳 毛鈍</p>

火

四三

個人研究費
 雲英不雄

56-04594

七夕

酒も申さねて酒呑星今宵
 早く合宿亭と吟して廻り入
 七ツや枕几偏に望むと聞
 其角

銀河

去来事やふ事かたりたる天孫川
 行舟のほろ勢流してこの川
 此處は裙よせたるゆれ銀河
 木因

鵲

鵲や石とおもひし如橋よわま
 鵲乃橋のうらまふあるは湯の
 かさねはや鶴もよ物と二ツ目
 貞裡

燈籠

燈籠のわざと暮人とおくまてん
 森々も乃燈籠をよ存お山
 美かき美男燈籠をよ存味いふ
 其角

高燈籠

この燈籠を意いふのらねたか
 人鬼の消てあすくの燈籠うか
 揚燈籠松よるまうくの物いふ
 遊竹

迎火

迎火や揚りものつふねつもと
 むくひたよ狐の影もよまき
 其口

迎鐘

打の響く物と志りて也迎鐘
抱きし撞子の鐘をむくひる

嵐雪
春富

施餓鬼

おもくや門をわりく施餓鬼棚
石籠よせききか樹の崩れり
庵の音おせの義方深アつか

荷兮
文里
百里

墓祭

つる人も今も孫も也墓祭
土器茶を皿や茶のうへに置り
墓系ちるる柳の系み

去来
卓袋
立縁

鬼祭

同一年お人もあかりふまつ
森乃そのころやう記玉系
おまゝある富也呪符をかく

雲口
去来
調柳

蓮飯

禊ふてもおろきささ道のは
松の葉や包むらぬとまきの飯
おまの石をばらすも道は飯

一髪
支考
同

麻箸

似合くやふ箸よかほく麻中堂
ふき人の数もさう売は折しり
かろくも麻木の箸もま四並

亀洞
全峯
惟然

風尾中

風尾草の袂よかゝる洞の形

梅氏
桃妖

生身鬼

せせく魚の骨探るのきせ方
うきくた身をばねや生身鬼
生身玉をくたふ人杖はき

方山
百里
亀洞

盆月

盆の月をばねくつを押し
うちむふ子粒を白くを月
洞のきくはねくたふは月

野坡
李由
同

送火

送火やうくはるの袂腰
くちやうく人並に燃すも
おくりはるはねくたふは月

史邦
柳江
亀翁

花火

お乃次ははるく思ふ系ちふ
お乃次ははるく思ふ系ちふ
盲子あはるはねくたふは月

神寂
桂夕
春富

踊

里踊火やうくはるかきるふ
踊るはるはねくたふは月
つるはるはねくたふは月

安之
去雷
尚白

相撲

都もも仔まうりるしう力取
お撲とり並つた秋の庵綿
裸身よ麻糸白ひやお撲とり
去来 嵐雪 誅六

秋風

俵しゆや腕の衣吹秋の風
ちりおや麻州海の秋の色
秋風やとよまれのまうもろく
野童 越人 来山

初嵐

鶺鴒の尾よほしきるし初上り
初嵐の風ちり小庵い嵐よろり
日と相む延きぬは初嵐
荊口 濁子 嵐雪

暴

あめしう来と海りせうらふ
温泉燗の地と遠きりおふ山
小原女や野まじりかき
園女 東睦

露

く川露や枝の外芝の記あり
ちりしうぬりよめかまのよ山の露
朱砂の啼しうかふ露あふ山石
去来 孝和 舉白

霧

青雲や霧かきぬしとくは
初霧やとよまろり霧の系
帆柱のあふぬや雪のしう山
其角 毛鈍 北枝

稻妻

稲妻や靉靄きく野の白ひ
 古の原 稲妻あつこふかたつき山
 しのけまきおぼろるる取けく像影山
 路便

虫

若さゆふと鶉追んむしの聲
 菜畑や二匹の中お虫の声
 虫くもおとさるるそら中お
 尚白
 句空

蜻蛉

去りぬや蜻蛉はわりの流り
 蜻蛉の翅をわらふと眼おろか
 富士やまきまの蜻蛉の流るる
 横凡
 惟然
 知足

結蠶

葉巻唐の巻たよ枯ると山鳥のふ
 木蠶おお啼くはる木の風信お
 りお虫いふの舞のふおあおるお
 御之
 知行
 淵泉

竈馬

かぐるまや葉巻く追やる稲の上
 曉お風吹くは清きいこふ
 竈馬やおおつて中お
 北枝
 孤屋
 掉哥

蝟

日くしとや山田まきまの音
 へくまきや蝟の泣きまの飛
 まくまの蝟やある神の音
 立組
 颯竹
 風麦

蝓螂

蝓螂のあむるは狗のなきは
 蝓螂のあむるは狗のなきは
 かまきりや裾掛ふらむらうら

史邦
 千流
 士夫

松虫

松虫のあむるは
 松虫のあむるは
 松虫のあむるは

沙明
 嵐雪
 其角

鈴虫

鈴虫のあむるは
 鈴虫のあむるは
 鈴虫のあむるは

桃状
 桂士
 其角

秋蠅

秋の蠅のあむるは
 秋の蠅のあむるは
 秋の蠅のあむるは

昌房
 松吾
 千那

秋蟬

秋の蟬のあむるは
 秋の蟬のあむるは
 秋の蟬のあむるは

夫中
 晚山
 百里

秋蝶

秋の蝶のあむるは
 秋の蝶のあむるは
 秋の蝶のあむるは

舟泉
 言水

冬蝻

ふゆのこらゝも志も體のちりゝ三
啼きたるは境なきも冬蝻の
しほらぬも赤くありたるいふこら

成水

奉日

風子

蟋蟀

草の葉も足の折るもさうり
ふゆれいももももも蟋蟀
戸計桶の音もさうりもさうり

荷兮

智月

凡化

柳散

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

土芳

三風

宗長

桐葉

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

其角

湖水

望一

木槿

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

嵐葉

杉風

蛇石

雞頭

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

嵐竹

史那

万牛

火

五十一

芙蓉花

おのれに任せぬる身もたぬ
かゝる心抱しれさる地の志あり
おのれに任せぬる身もたぬ

濁子
呂風
松吾

葦

隣りある葦舟よりうらみ
船の心と対しれさるも美しき
あき秋もこの心さる堀乃際

鷗柴
尤磨
平交

秋海棠

秋海棠秋とよみ海の市うら
神めは秋海棠の心よきま

凉菟
琴風

萩

中川よそれかおのれ秋の心
第戸抱ゆる心よも萩の花
おのれも小萩よもも萩の花

李由
志賀
去来

萩

人をさしけ雨声はなる萩の声
身も秋よ萩の花も萩の花

雪芝
呂風

野菊

名もなきの野菊よ萩の花
山々の葉もささけも又遠い

素堂
百百
越人

芙蓉

花のまはら夕霧あふらぬ芙蓉あふ
晨明のぬれてる花のまはら芙蓉あふ
百合のまはら芙蓉あふと語り合ふ
呼人
其行
風麦

蓮實飛

蓮のまはら花のまはら蓮のまはら
蓮のまはら花のまはら蓮のまはら
蓮のまはら花のまはら蓮のまはら
猿雖
素堂
百里

蓼花

お蔭のまはら花のまはら蓼のまはら
飯のまはら花のまはら蓼のまはら
木履のまはら花のまはら蓼のまはら
其角
風化
木節

葛

葛のまはら花のまはら葛のまはら
葛のまはら花のまはら葛のまはら
葛のまはら花のまはら葛のまはら
嵐竹
朱拙
山店

芒穂

芒の穂のまはら花のまはら芒の穂のまはら
川の水のまはら花のまはら芒の穂のまはら
芒の穂のまはら花のまはら芒の穂のまはら
防川
亀洞
路通

蘭

蘭のまはら花のまはら蘭のまはら
蘭のまはら花のまはら蘭のまはら
蘭のまはら花のまはら蘭のまはら
桃隣
嵐雪
知行

火

芒

芒切て帯幅と云くも芒と申
年々根古根も此すきふ
芒切たはと云くも芒と申

荷古
俊似
牧童

尾花

秋の尾花は根を又折ふ折ふは
吹おろし吹のちも岨の尾花は
野の物乃尾花氣吹と云くも尾花は

李下
松古
其角

番椒

石其と云くも根を又折ふ折ふは
葉を吹くは吹のちも岨の尾花は
籠の物乃尾花氣吹と云くも尾花は

野坡
胡及
央邦

谷野

山伏の切やと云くも谷野は
中りりり川も谷野は
谷野の切やと云くも谷野は

野坡
任口
志友

草花

草花は根を又折ふ折ふは
下りりり川も谷野は
草花は根を又折ふ折ふは

野坡
左標
調之

芭蕉

芭蕉は根を又折ふ折ふは
秋の芭蕉は根を又折ふ折ふは
芭蕉は根を又折ふ折ふは

依之
加生
乙州

秋

葛

やまの葛も言ひ葛のしるし
椀の葛も言ひ葛のしるし
葛の葛も言ひ葛のしるし

越人
扇堂
卧高

蕎麥

そばの蕎麥も言ひ蕎麥のしるし
そばの蕎麥も言ひ蕎麥のしるし
そばの蕎麥も言ひ蕎麥のしるし

素堂
乙外
荒蕪

木綿

木綿のしるし木綿のしるし
山細のしるし木綿のしるし
山細のしるし木綿のしるし

ト枝
松吟

西瓜

西瓜のしるし西瓜のしるし
西瓜のしるし西瓜のしるし
西瓜のしるし西瓜のしるし

素人
素堂
一江

瓢

瓢のしるし瓢のしるし
瓢のしるし瓢のしるし
瓢のしるし瓢のしるし

沾圃
桃妖

零季

零季のしるし零季のしるし
零季のしるし零季のしるし
零季のしるし零季のしるし

為有
野徑

八朝

ハ朝ヤ毎養老のまきり
ハ朝ヤ酔のこころ

沙菜
許六

三朝

三日月の蒼の毛意をかり
約束のゆるやせらん
三日月のあつらひのまじり

之道
去来
素堂

月

おろくもむをなれは光ふ
かぶるともあはれ海のな夜ふ
月の頃清の根よきる

智月
露川
胡及

待宵

おのれをいとせよとて
待宵也羽衣のしるいあはれ事
詠人をとせよ待宵のせすし

牧童
羅人
同

名月

名月也とせよ月を
名月の折もあはれ
名月のこころを

信徳
轍士
湖春

既望

いさよひにたし
十六夜の月を
既望の月を

去来
許六
猿籠

后月

後の月 尺の月 宇治の巻ありん
其角 其角 其角
其角 其角 其角

駒迎

一戸や 破る 駒のり
其角 其角 其角
其角 其角 其角

放生會

尾を 振る 放生會
其角 其角 其角
其角 其角 其角

初潮

初潮 初潮 初潮
其角 其角 其角
其角 其角 其角

稻花

買う 稲花 稻花
其角 其角 其角
其角 其角 其角

稻

稻 稻 稻
其角 其角 其角
其角 其角 其角

早稻

早稲の早田中はあの人出入
早稲も穂を早くたるとは
世のくさむらじ積出のあ
呂風

晚稻

狼死せぬやうなる晚稲の中
わらわらやあま貯ふがては
唯稲田の焼く方本道
遠水

落穂

籾の卵を落しぬ穂の中
拾つてく肩をたたくの音
禪の数の珠持とるる
木導

案字

もの言ひを倒す案字
おげとる人形のかげ
山城の案字作る
重立

鳴子

舌裁く鳴子の温や急のうち
山圍ふ小松のうらや
此村の西房障り鳴子の
古梵

引板

夕陽を引板の音
山陰よりの虹の板の
鳴りの引板の音
秋色

漆水

きくねく 漆水の端もよぬか 原合
多勢を也 漆水のきり道志ふ 普船

鳥驚

ある怪也かきくはらよものや 一酬
種物の儀也さくねをかじり 涼菟

落水

秋もたやふしをさふのひ春の 昌房
雨乞し中もあきさきさき 古梵
きくひく入りさきもさき 水 同

落盤

落盤のてふさきさき 渡りのか 一桃
さきさきもさきさき 世の嘆きの盤 重頼

秋作物

西栗園に果実まきさき入りか 空方
黍の穂たふる迹 たるさき色 越人
秋の田もさきさき 稗二儀 尚白

新酒

新酒の 新酒人の酔さき 嵐雪
足あき 新酒の酔さき 支考
新酒の酔さき 酔さき 上谷

新酒

上谷

鴟

鴟の啼きも 僕赤らむ 袖のうら
 帷もさびしき 冷し鴟の啼き
 百舌も 鴟の啼き 入らさく 色小雲 魚
 支考
 史邦
 凡兆

鷓

牛河の 鷓の啼き 夕暮の 那
 石の 鷓の啼き 鷓の啼き
 鷓の啼き 鷓の啼き 鷓の啼き
 言水
 肅山

鷄

消その 鷄の啼き 鷄の啼き
 かみ 鷄の啼き 鷄の啼き
 投煙の 袖の 鷄の啼き 鷄の啼き
 正秀
 琴風
 五芝

木啄

木啄の 木啄の 木啄の 木啄の
 木啄の 木啄の 木啄の 木啄の
 木啄の 木啄の 木啄の 木啄の
 雨桐
 曲琴

鶺鴒

鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の
 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の
 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の 鶺鴒の
 氷因
 游日
 磨盤

鳩

鳩の 鳩の 鳩の 鳩の
 鳩の 鳩の 鳩の 鳩の
 鳩の 鳩の 鳩の 鳩の
 野水
 肅山

鹿

列々鹿死て笛する大い山うか
其角 送牛
鹿のまふ人の鹿らるる夕々ふ
一髪

菌

茸持てけりぬを我ら回ふる
素堂
きりけりぬを我らも兜に掛く
利合

松茸

松茸や中より中を我ら夜更の
吾仲
松茸は白くくまふ河のふくら
素堂

初茸

初茸は初茸は初茸も一集り
智子
初茸のうらむる初茸日乾山
沾蓬

柿

渋柿は初茸の中より山の
呂風
渋柿は初茸は初茸も一集り
正秀

栗

栗は初茸の中より山の
立路
栗は初茸は初茸も一集り
其角
日鐘は栗は初茸は初茸の中
素堂

火

五十一

團栗

赤栗の如きもの多し
赤栗の如きもの多し
赤栗の如きもの多し

杜下

其帯

為有

椎

椎松の如きもの多し
椎松の如きもの多し
椎松の如きもの多し

夕潮

丈中

トト

木實

松の如きもの多し
松の如きもの多し
松の如きもの多し

李由

嵐雪

重九

重九の如きもの多し
重九の如きもの多し
重九の如きもの多し

観水

逢雨

桃隣

九日

九日の如きもの多し
九日の如きもの多し
九日の如きもの多し

和及

二水

浪化

菊

菊の如きもの多し
菊の如きもの多し
菊の如きもの多し

昌碧

曉龍

軒柳

残菊

もろきうしきまのあはれ葉を枕に
望水

持衣

戸のあかり灯のゆりけの砵子
立志
まのあかり燈のあはれ葉を
横几

露時雨

舟をさぐ酒のうらやまのあはれ
北枝
舟のあやめのあはれ葉をのあはれ
大甲
舟のあやめのあはれ葉をのあはれ
遠水

秋雨

ぬいねはあはれ葉をのあはれ
尚
秋の雨のあはれ葉をのあはれ
野水
秋の雨のあはれ葉をのあはれ
翠白

紅葉

小田のあはれ葉をのあはれ
秀和
かみのあはれ葉をのあはれ
其角
あはれ葉のあはれ葉をのあはれ
八木

秋夜

秋の夜中ちあはれ葉の油さる
好春
秋のあはれ葉をのあはれ
許六
秋のあはれ葉をのあはれ
末山

長夜

もろもろと寝中ふり寝き危
くもも目とてゆらあまき枕山
つまらぬひききくぬのめかあはる
野水

夜寒

あゝ寝るは就の道はくおき山
ねんよ新酒とてゆらあまき山
ともすれのおも寝るのめかあはる
支考
丈中

鴈

かきくももぬききくぬのめ
物ねやとのきたるもあまのぬ
くくぬくももぬききくぬのめ
鬼世

秋暮

候々たる寝の寝るや秋の寝る
秋の寝る灯やとてゆらあまのぬ
立出くくぬききくぬのめ
嵐雪
越人

行秋

けり秋よとて寝るもぬき裕の那
けり秋よとて寝るもぬき裕の那
ゆり秋とて胡らとてぬき裕の那
史邦
乙外

秋雲

新掃のあまのぬき裕の那
ゆり秋とて胡らとてぬき裕の那
ゆり秋とて胡らとてぬき裕の那
史邦
乙外
涼菟

築

のりまの魚の栖やん
築ちまの山く
くまの築ちまの山く
心水

渡鳥

山く
山く
山く
去来

鉅

川音は
川音は
川音は
涼菟

未枯

未枯
未枯
未枯
五峯

冬之部

<p>初時雨</p>	<p>初時雨の初は 初時雨の初は 初時雨の初は 初時雨の初は</p>
<p>時雨</p>	<p>時雨の初は 時雨の初は 時雨の初は 時雨の初は</p>

荊口

端水

湖春

同

其角

文中

巨燧

燧の火を燃やして照らす巨燧の
雪志
我峯

炭

山を削りて炭を採る炭
炭
其角

炭竈

炭を焼く竈の形を炭竈
子冊
不焚

埋火

火を埋めて燃やす埋火
神寂

櫓

櫓の火を燃やす櫓
去来
探志

十月

十月の月を照らす十月
幽也
尚白
来山

神無月

物の忌む神無月杭よ神守り月
山店
禪もあまの庭に神を丸
元兆
神守り月灯籠の光を丸
言水

神送

神無月の年の暮りきけ神をこ
卜枝
高の忌みあまの庭を神を丸
越人
神守り月燈籠の光を丸
洒堂

神聖

神もやまを丸く神の光を
李卜
高の忌みあまの庭を神を丸
神寂
神守りの光を丸く神の光を
涼菟

小春

小春の光を丸く神の光を
言水
神守り月燈籠の光を丸く
李由
神守り月燈籠の光を丸く
路通

達磨

達磨の光を丸く神の光を
竹良
達磨の光を丸く神の光を
梅葉
達磨の光を丸く神の光を
李由

十夜

十夜の光を丸く神の光を
路通
十夜の光を丸く神の光を
杉風
十夜の光を丸く神の光を
許六

御影講

清い影講御影講のくしの御影
御影講も御影講のくしの御影
よふ人影影の御影の御影

あすの影影の御影の御影
影影の御影の御影の御影

御取越

御取越の御影の御影の御影
御取越の御影の御影の御影

御取越の御影の御影の御影
御取越の御影の御影の御影

蛭子講

蛭子講の御影の御影の御影
蛭子講の御影の御影の御影

神迎

何れも御影の御影の御影
何れも御影の御影の御影

顔見世

顔見世の御影の御影の御影
顔見世の御影の御影の御影

吹草祭

吹草祭の御影の御影の御影
吹草祭の御影の御影の御影

御影

五廿六

冬立

つがいの小春もあふふとあふふ
 乙外
 仙窟

風

本ついでに一日の風も吹かす
 尚白
 残香

冬立

萱の家の傍りもあふふとあふふ
 琴風
 元兆
 ト千

冬山

松の葉もあふふとあふふ
 素牛
 氷巻

冬日

冬の身もあふふとあふふ
 諷竹
 洗悪

冬月

魚の店もあふふとあふふ
 其角
 里東
 我眉

冬夜

何れもくも夜懐とて寝たり
冬之夜乃月夜中も花とも

其角
素風

冬籠

冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風

杉風
彫棠
野水

冬構

古寺の竹青も春の山風
梅の枝も春の山風
冬籠籠るも春の山風

仇北
西梁
程巴

寒椿

いづれも一庇おるやいづれも
冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風

亀洞
木因
同

枯菊

色くの菊も春の山風
冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風

柳水
嵐雪
杉風

寒菊

冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風
冬籠籠るも春の山風

湖風
嵐竹
許六

桔芒

小坊らうも藤入るまじも 枯さるま
口まじり 種垣ゆえの桔芒
氣をばけつる種まじり 枯さる

配力
一髪
杉風

水仙

ふ水仙の系乃り くるも 数花
水仙の空あつひ くるも 数花
ふ水仙や 一車と 安房の船便

惟然
一品
專吟

茶花

本郷の茶の花ゆえ 折まじり
茶の系は世もは ぬ白しう系
茶の色は 茶を や ちと ころよらん

猿雖
正秀
色風

石落

破まじりの石落よ 数花の 鮎
石の落 ころまじり かけの系

諷竹
胡友

帰花

帰花の系乃り くるも 志のん 楚さる
一輪の 雛の ころまじり 帰花
何のゆえ 何のゆえ 何のゆえ

其角
曲翠
未山

茶山花

山系花の 観の 帰花の 系乃り
山系花の 氷を たく 数隣
山系花の 系乃り 何の 懼る

言水
李農
柳土

冬

七二

枇杷

農明の秋すまきし物枇杷の系
ついでにゆきまきしにを枇杷
山小まきし練つるり枇杷の系
宗し 尚白 及松

冬荷

冬牡丹定るるき出るる
もれ下物おのれんのいつ候
りきあつるちれまきまき牡丹
犬中 依之 杜旭

木葉

たるるのれれあまあも唐の亮
おもひかしのれれあまあも唐の亮
岩るるよんやかあるるまれあま
杉風 沾徳 其角

落葉

義唐の落ひ乃れあまあも唐の亮
落葉あまあも唐の亮
ちるるれれあまあも唐の亮
玄梅 柵雪 巴風

枯柳

何れれあまあも唐の亮
余のちるるれれあまあも唐の亮
越人 涼菟

蕎麥

蕎麥刈也をちるる伊あまあも唐の亮
あはるるれれあまあも唐の亮
素竜 桐貫

...

廿三

菱蔞

菱蔞の葉は赤く五葉よねにありて
むしとる能く滋養あり山うら
のよきし也菱蔞の葉のよきとく
一升

大根引

今やうもさうある大根引
沙漬の大根はよく有る
俊似

芥菜

芥菜の葉は青く花は白く
つれづれのよきものなり
のよき芥菜は花の痛みの故也
一峰
探丸
次村

葱

葱の葉は青く花は白く
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
雨橋
百花
次村

蕒

蕒の葉は青く花は白く
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
蕉笠
依之
松芳

霜

霜の葉は青く花は白く
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
つれづれのよきものなり
杜園
吞舟
全峰

廿四

霜夜

つらも初くそのおきお初たか
尺中
山火とるお嶽おひお夜ふ
其用

霜柱

おろしとて敷後さそおろし
野童
おろしとて敷後さそおろし
凍鬼

千鳥

氷戸おとつ入りのちるおのふ
丈中
志き波ぶうき揃ある千鳥
冬柏
荒破也さきと別いさ友ちるま
去来

水鳥

くもるお溜りおつこはるお
揚水
くもるおのびるおおる山鳥のふ
倫女
くもるおのちるお山鳥のふ
湖風

野鴨

くもるおのちるお山鳥のふ
才磨
くもるおのちるお山鳥のふ
才磨
くもるおのちるお山鳥のふ
才磨
くもるおのちるお山鳥のふ
才磨

鴛鴦

くもるおのちるお山鳥のふ
雷雲
くもるおのちるお山鳥のふ
木節
くもるおのちるお山鳥のふ
野水

鶇鶇

鶇細や氷の下農かわけのま
指由とくると多たさのたふり
鶇皮は非獲をぬくつり
柴車 更明 次村

鶇鶇

鶇乃日と鶇うとつと鶇はわ
鶇鶇よあつと鶇つと鶇の鶇
鶇つと鶇つと鶇つと鶇はわ
依之 祐補 許六

鷹

鶇鶇つと鶇つと鶇つと鶇はわ
鶇鶇つと鶇つと鶇つと鶇はわ
鶇鶇つと鶇つと鶇つと鶇はわ
冬市 木導 遅雲

暖鳥

ぬつと鶇つと鶇つと鶇はわ
暖鳥つと鶇つと鶇つと鶇はわ
放ち鶇つと鶇つと鶇つと鶇はわ
丹丘 柯上 藤白

木兔

みつと鶇つと鶇つと鶇はわ
木兔の鶇つと鶇つと鶇はわ
半残 葦中

追鳥狩

追鳥狩つと鶇つと鶇つと鶇はわ
追鳥狩つと鶇つと鶇つと鶇はわ
史邦 一條

冬蠅

ある金とて惜とぬるの
まをばしとて指のまをばし

史邦
嵐亭

蒼鱸魚

鯉鱸の腹を切らぬ
あへんと先流る耐の

其角
莫陵
山夕

空鮭

うゝ鮭や死するげの口を
束ふのか鮭作の

雪芝
乙州
除風

蛎

あつちの蛎は
かきむねも見ぬれも

嵐雪
其經
荻子

夜興

あつちの夜興の
あつちの夜興の

氷花
子齋
奉白

河豚

あつちの河豚
あつちの河豚

檀泉
其角
八橋

鱈

かたきろをて鱈といふ。山形
と川崎の沖の釣場。二百等
鱈、丹や比らより北と雪の氣色

和重
周指
李子也

生海鼠

尾の白く、あつと生海鼠
生海鼠、喰いさく、あつと
むくは、あつと生海鼠、あつと

去来
嵐雪
露沾

鯨

鯨、あつと、あつと、あつと
今、あつと、あつと、あつと
鯨、あつと、あつと、あつと

野坡
吉女
万年

網代

静、あつと、あつと、あつと
川、あつと、あつと、あつと
あつと、あつと、あつと、あつと

丈中
其継
林長

霖

あつと、あつと、あつと、あつと
あつと、あつと、あつと、あつと
あつと、あつと、あつと、あつと

卯七
暮年
杜旭

寒

あつと、あつと、あつと、あつと
あつと、あつと、あつと、あつと
あつと、あつと、あつと、あつと

桂之
本導
卧高

寒中

尚つても脾胃のはきき寒中
おろ指の寒もはきき寒中

千川
浪化

寒声

寒声の来りぬけ
かんあつたみ糸あつた星内夜

仙杖
加枝
乙孝

寒垢離

寒垢離の功くきき
くんたるしおく出る朝山嵐

路通
母風
取具

眠

あつた眠りぬけ
眠りぬけぬけぬけ

氷花
吾東

薬喰

活んぬきぬけぬけ
薬喰葱もぬ戒のぬけぬけ

支考
山夕
芦本

納豆

納豆の枕もぬけぬけ
納豆の川もぬけぬけ

汀芦
除風
支中

寒

廿七

紙衣

文よりききぬ衣の切を譲り
油引くは雨の道に紙衣は

夫中 只吟 舟行

頭巾

湯衣家阿片年をきく用紙巾
く川を渡りまはるる紙巾を

蟬吟 毛純 其幄

衾

何事も寐入るまはるる衾
はききぬの海をきく衾

小春 尚白 千邦

足袋

古足袋の甲より口よりふくむる
雨より雨は足袋は寝衣は

嵐雪 巴雪 月下

湯婆

出乳女の湯婆をばはるる湯
ふくむる湯婆をばはるる湯

嵐雪 正秀 嵐雪

衾

衾をばはるる人のもききぬ朝の
く川雪のく雪をばはるる衾

桃湊 利井 紅雪

雪

雪の白く打や雪の所
雪の白く打や雪の所
雪の白く打や雪の所

去来
猿籠
嵐雪

霰

霰の白く打や霰の所
霰の白く打や霰の所
霰の白く打や霰の所

斧鉄
去来
画好

雪吹

雪吹の白く打や雪吹の所
雪吹の白く打や雪吹の所
雪吹の白く打や雪吹の所

去来
乙列
湖春

霰

霰の白く打や霰の所
霰の白く打や霰の所
霰の白く打や霰の所

野童
嵐雪
好春

標

標の白く打や標の所
標の白く打や標の所
標の白く打や標の所

會咭
一井
長虹

搖

搖の白く打や搖の所
搖の白く打や搖の所
搖の白く打や搖の所

道達
嘯花
紅紫

氷柱

そゆゑあま〜 籬のけらうか 虚吟
川越一馬の尾より氷柱の 琴風
航柱の氷柱をすうに朝日系 其角

氷

枯草の氷を残れぬ汐系 苔蓼
豆代や櫓のり氷うす氷 許六

凍

凍はまの凍舟のり〜 篠の凍 秋之坊
の〜ゆゆ魚のり〜 氷死凍 氷央
去〜え玉ぬきのぬゆ 櫓き記 其角

神樂

嵐のりぬ奇もぬ〜 神のり〜 利堂
去の起る神のり〜 紫栗
神樂のり〜 去来

寒念佛

あ〜のりぬ〜 其角
ゆ〜のりぬ〜 鹿臺
あ〜のりぬの掃巾ぬ〜 支考

鉢扣

鉢〜のりぬ〜 乙外
ゆ〜のりぬ〜 山峰
ゆ〜のりぬ〜 去来

臘八

二月の初八日、此の日に
臘八のやうな雑炊のやうな味
臘八をゆつたきと御打

杉風
惟然
木道

御佛名

野から流るる御佛名
老らるる御佛名
御名のはら御名

落相
去来
野水

煤拂

煤拂の石らるる御佛名
家くわがも残るる煤拂

不卜
嵐策
祐圃

葺葎

目からさるる葺葎の作
葺葎のやうな御佛名

一洞
浪化
惟然

師走

山伏の人名の師走
碓の石らるる師走

嵐雪
紋水
正秀

餅搗

餅搗のやうな御佛名
餅搗のやうな御佛名

徳水
嵐雪
佳峯

冬

八十三

年志

年志の巻了 樹岩起りてむ
向ふに 咄もあやと年志
道に 通し 筆貫 垣落し 神光

洒堂
曲翠
竹亭

曆賣

古曆や 人もよと 未だ 未だ
已る 未だ 未だ 未だ 未だ
梅も 梅も 梅も 梅も 梅も

孤屋
如髮
嵐雪

年市

年市 年市 年市 年市 年市
目も 目も 目も 目も 目も

魯尚
凉菟

豆離

豆離 豆離 豆離 豆離 豆離
むら むら むら むら むら

其角
亀洞
智月

年暮

年暮 年暮 年暮 年暮 年暮
解の 解の 解の 解の 解の

正秀
其角
杉風

ふ配

ふ配 ふ配 ふ配 ふ配 ふ配
ふ配 ふ配 ふ配 ふ配 ふ配

曾良
山峯
望翠

冬

八十四

四見

四見よと妹はくろひ勢小部の内
ふきまふ一雪と都の園えは
嵐雪 允北

待春

待春や松の接ふ書は小口
まらちの櫓つゝかゝる菜畑は
待春や水も流るる魔のくこ
浪化 亀洞 智月

行歳

行歳よと志とねく状をくら
りくも親ふおぼえ隠れり
ゆくまゆみの無きまふ
湖春 越人 沙明

大年

大年よと親ふ儀の山
同一人よ亦過年ぬしと日か
雀のつらむ日とゆめを以て大嘗
万年 仙花 其角

歸輝

此書也字法新麻黃海章
通高盤障計為卷今年也
時多皆新通板尔惠理
因隣滿岐尔索新多流

之保新遠祐を伴士と云
登平や門阿連飛也久高
隣久波色侍里智

阿うまの

澄子



跋

古之狀尾名能亡之阿權集
の毛而歌やと事十有七西
此臨幅の為とよて婦に毎の
明るる一様縷るるを憶ふ

予の志は此の爲に成るるを以て
東土にてもそのをなん世に
好むる人の言つては
真の心はしるるを以て

松の爲に成るるを以て



跋

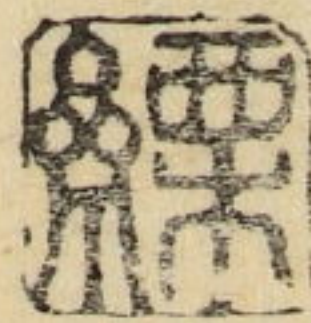
探遠末題分兔也角與案兵尋古未
人焉為宗言端之文焉有尤則何一條
捨之而有孰所可求艸帝焉哉雖
芭蕉翁大名從人形天皇之頃時宗
喟河豚止時分迫者風儀不全穩
了共至元錄之始而調未具劍兵
然則春秋菴白雄居士摘公其色以
花盛耳而集五百題之族白字而於

成一卷幸今年也昨烏子嗟而世于
朽子鏗梓亡師手向靈前亦此道之
不卷言哉示云

文化丁卯秋

栗齋

八雲誌



京三条通寺里西八入

菊舎 太兵衛

大坂南本町二丁目

葛城 長兵衛

全心齋橋北久太郎町

鹿 寫忠兵衛

江戸本石里

西村 源六

同所十軒店

英 平吉

同浅草南馬道町

栗村 半藏

